

今、大学で何が行われているのか
- 高校に期待されていること -

開倫塾
塾長 林 明夫

1. はじめに

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴き頂き、ありがとうございます。

今日1月17日土曜日と明日18日日曜日は、大学入試センター試験日です。全国の受験生、特に栃木県、群馬県、茨城県の受験生の皆さんは頑張っていたきたい思います。

2. 高校に期待されること

(1)そこで、今日は、大学について少しお話させていただきたいと思います。大学の抱える現代の問題は何か。その原因は何か。その対策をどのように行ったらよいのかということについてお話をさせていただきます。

(2)日本では、中学校を修了して高等学校に進学なさる方は98%で、100%近くになりました。短大、専門学校、4年制大学などを高等教育機関と言います。この高等教育機関に進学なさる方は、高等学校卒業生の76%です。約8割の方、4人に3人、ないし、5人に4人ぐらいの方々が、高等学校卒業後に大学、専門学校、短期大学などに進学なさっています。これは、「大学の大衆化」、あるいは「高等教育の大衆化」と言われています。

(3)では、それらの高等教育機関に入るのは難しいかと言うと、そのようなことはありません。短期大学、4年制の大学でも定員割れ、つまり受験生・入学者が定員に満たないというところが結構多くあります。何割かの大学、半数近くの短期大学が定員割れを起こしています。ですから、大学入試は昔ほどは難しくありません。今日と明日に行われる大学入試センター試験には難しい問題も出題されるでしょうが、入学することは昔ほど難しくありません。もちろん倍率の高い大学は難しいですが、そうでもない大学もたくさんあります。ですから、選ばなければ大学や短期大学に入れる方はたくさんいます。定員を受験者数が割っているわけですから、大学入試に関しては非常に楽な時代になったとも言われています。はなはだしい大学では、入学試験が終わったあとにその大学を受験した受験生全員に電話をかけて合格させるということもある、そのような大学すらあるということも、巷(ちまた)で噂されています。大学はそのくらい入りやすくなったということです。

(4)そこで、問題が出てきます。簡単な大学入試が多くなりましたので、高等学校の生徒があまり

勉強しなくなったことです。大学に進学するためには多くの勉強が必要なはずですが、昔ほどしなくなったということです。一番問題になっているのが、学力不足の大学生・学力不足の短大生・学力不足の専門学校生が増えてきたということです。

これは、高等学校の教育に問題があるわけですね。大学、短大、専門学校等の高等教育機関に行く、進学するのであれば、高等学校の3年間に高等学校で学習する内容をきちんと身に付けたほうがよいのですが、7割から8割の方が進学する中にはそれらが身に付いていない方も存在するということです。また、入学試験を受けずにAO入試といって面接や作文だけの簡単な試験で入ってしまう大学もたくさん出てきていますので、これも問題です。

(5)私の考えは、高等学校にもっとしっかりしていただき、大学、短大、専門学校等に生徒を送るのであれば、高等学校ではそこでの教育に耐えられるだけの教育を行っていただきたいということです。3年間では足りないのであれば、4年、5年かけて高校教育を行うべきです。単位制にして、1つのことがよく理解できたら次に進むようにする。高等学校は3年間で終わりにしなくてもよいわけですから、3年から5年ぐらいかけてゆっくりゆっくり行き、きちんとした学力を身に付けさせてから上の学校に進学させたり就職させたりする。これも1つの考え方だと思います。

(6)日本では、高等学校では学力が不足するために留年することはあまりありません。出席日数が足りずに留年するという方はいますが、学力が不足して留年する方は非常に稀(まれ)です。ここまで高等教育機関に進学する人が増えてきたのなら、学力が不足しては単位の取得もできないので留年させるという考えが、そろそろ出てきてもよいのではないかと私は思います。

3. 今、大学で何が行われているか

(1)大学ではどのようなことが行われているかと言いますと、学力不足の学生については、中学校や高等学校での勉強が足りない場合には「補修教育」、補修のホは補う、シュウは修める、英語では Remedial(リメディアル)教育が盛んに行われています。

(2)医学部に入学したのに高等学校で生物を履修してこなかった、地球環境を学ぶ学部なのに地学をやってこなかった、法学部や経済学部なのに日本史や世界史、倫理・社会を十分に勉強していない、工学部系なのに微分・積分がよくできないなどという学生については、中学校や高等学校で足りなかった教育を補う・学力不足の学生を補うという Remedial(リメディアル)教育・補修教育が盛んです。

(3)また、大学での教育は、学び方を学ぶ能力が身に付いていることを前提として行われます。学び方を学ぶ能力が不足している学生に対しては、「初年次教育」が行われます。図書館の使い方やレポートの書き方なども教えることが盛んに行われています。

何のために学ぶのか、何のために働くのかなどがよくわからない学生に対しては、「キャリア教育」と言いまして学習の動機付けをする教育が非常に盛んに行われています。

(4)この「Remedial 教育」、「初年次教育」、「キャリア教育」などで、学力不足の学生、学び方を学ぶ能力の不足している学生、勉強する意味のわからない学生を補うことが、各大学で行われています。

大学は、これらに加えて、留学生をもっと増やす、社会人の再教育をする、大学院で専門職の教育をもっと行う、大学を拡張してより多くの一般の方々にも勉強してもらうなど、新しい取り組みをしています。このように、地域における大学の役割を考えることが盛んに行われるようになってきました。これからは雇用を維持するために仕事能力を身に付けさせることも大学の役割となり、失業率を下げるという役割も出てきます。これからの大学は、このような形で新しい役割を果たしていくことも大事ではないかと思います。

4. おわりに

私は、宇都宮大学大学院工学研究科の客員教授を2年間務めさせていただいており、その前は同大学院の非常勤講師をしておりました。併せて3年間ほど、宇都宮大学大学院工学研究科で教えさせていただいていますので、そこでの経験も踏まえて、今日は大学についてお話をさせていただきました。

皆様にもぜひ、大学の問題にも関心を持っていただければと思います。

[コメント]

大学をとりまく状況がガラッと変わったのだから、高校はもっと柔軟性をもって修業年限を考え「きちんとした学力」を身につけさせるべきだというのが私の考えです。

- 2009年5月10日林明夫記 -